

## 第70回記念埼玉県美術展覧会 審査評

### 【第5部 書】

#### ○総評

審査主任 ありおか 有岡 しゅんがい 鄭崖

第70回記念展の総出品点数は445点、公募出品点数は372点、前回展に比べ総数で67点の減、公募では61点の減でした。このところ減少傾向が続いていますが、長期に亘るコロナ感染症拡大の影響や出品者の高齢化などを考えれば、若干の寂しさはあるものの甘んじて受け止めなければならない現状と言えましょう。今後は若い世代への啓蒙、啓発などを通じ、何とか歯止めをかけることが強く望まれるところです。

一方出品作の内容においては、実力伯仲、鑑別、審査にあたっては厳正公平な審査理念に基づいて行い、その作業は三次審査、時には四次審査にも及びました。結果入選数238点(入選率64%)うち特選11点、委嘱招待から選ばれる埼玉県美術家会会長賞、高田誠記念賞の2賞を加えた13点の入賞を決定させていただきました。

一点一点の作品に込められた作者の熱意や思いを受け止めつつ、拮抗する力量の作を鑑別、審査することには大変苦慮いたしました。

入賞入選された方々、今回は残念ながら選にもれた方々、更なる研鑽を重ねられて、次回もまた県民に愛されてやまないこの県展に、力作を出品くださることを切に期待します。

#### ○埼玉県知事賞

おうあんせきし 「王安石詩」 つちや 土屋 せんしゅう 千秋

墨色美しく表現した三行書です。線質、墨量の変化、心地よい空間のとり方、リズムカルな筆の運びの中にある筆圧の変化、文字の大小と淡墨を生かし、品格の高い、柔らかな曲線が心に響いてくる作品です。更なる精進と飛躍を期待してやみません。

#### ○埼玉県議会議長賞

ていほんりつし 「程本立詩」 まちだ 町田 ぶざん 武山

明るく伸びやかな線で構成された七言律詩は、作者が長年培った書風を基調にして仕上げられた力作です。筆がよく動き緩急を自在に駆使し、温かみの中に力強さを秘め、洗練された線質には躍動感があります。県議会議長賞に輝いた堂々たる作品です。

#### ○埼玉県教育委員会教育長賞

ふるさと 「故郷」 すずせき 鈴関 しゅんすい 春翠

調和体の魅力は、異質である漢字と仮名の組み合わせで生まれる景色の面白さであり、調和でもあります。行草の鍛錬を積んだと思われる運筆から生まれる多様な線と、墨の潤渇が創り出す立体感と効果的な余白がこの作品のゆったりとした情感を上手く表現しています。自作の詩が語る風景と書としての表現に齟齬が無く、調和体の魅力が最大限に発揮された作品といえるでしょう。

## ○第70回記念賞

おんていいんし あきやま けいすい  
「温庭筠詩」 秋山 桂翠

56字を行草体で上手にまとめた作品です。特に感じることは、連綿はほとんど入っていないのに字の大小、余白を上手に生かし、伸びやかさを出しています。安定した筆法で格調高い作品です。

## ○埼玉県美術家協会賞

はくきょいし にしむら けんう  
「白居易詩」 西村 軒雨

白居易の詩、五言律詩を隷書体で仕上げた作品で、隷書体の特徴である波磔を誇張し、力強く、全体の構成も統一感があります。一字の文字は前後左右の文字と共鳴し合い、リズム感も出しています。線質は単調にならず、伸びやかで勢いも良く、独自の隷書の世界を展開しています。

## ○埼玉県美術家協会賞

「けさみれば」 おおた しゆすい  
太田 珠穂

連綿の線に迷いが無い作品です。仮名の持つ円やかな造形と柔らかな線、縦に流れる線のキレの良さが上手く組み合わせさり、手練の技を感じさせます。配置の妙が生む景色も趣があり、工夫とセンスを感じます。仮名のゆったりとした線を、作者が丁寧に、深く長い呼吸で引いており、豊かに流れる“時”をも表現している作品です。

## ○埼玉県美術家協会賞

ようけいし たかばやし しゆんえん  
「楊炯詩」 高林 春苑

五言絶句を行草体で書いた作です。筆の抑揚を生かして線に立体感を持たせています。更には文字の大小の変化の組み合わせ方が絶妙で、作者の計算しつくされた理知的感性の高さがこの一紙に現出した作といえます。自然な気脈の貫通での表現はなかなか難しいものですが、ことさら潤渴変化を加えずとも何なく仕上げて見せたところに作者の手腕の高さを感じさせられます。

## ○さいたま市長賞

しゆんう やざ あきば しゆうがい  
「春雨夜坐」 秋葉 秀厓

3行の行草体で一口に言って個性的な作品です。強い線質で連綿もリズム感があり、素晴らしい行間の余白が上手にとれているので作品が明るく、楽しさを感じる作品です。なお、この作品に墨量の潤渴等変化を出せば一段と良い作品になると思います。

## ○さいたま市議会議長賞

りしゆんびょう しまだ そてい  
「履春冰」 島田 素貞

朱白印二顆の刻。金文での白文は曲線を生かし、金文の持つ温かみある線条を見事に捉え、印面に布字して刻してみせました。一方の朱文印は白文とは逆に直線を基調として二顆の印での響き合いに作者の意図があったのではないかと思われまます。朱白両印にみられる印を刀で欠く“サビ”と呼ばれる所作も適度で安心感を抱かせてくれています。

## NHKさいたま放送局賞

りょうかんし 「良寛詩」 いしかわ 石川 せいふう 清風

良寛詩の中から七言絶句を淡墨で仕上げた三行書です。墨量を含んだ線も重くならず大胆な構成となっています。筆圧の変化、文字の大小、中心の連綿が一層作品を引き立てています。緻密な性格を伺わせる作品です。

## ○読売新聞社賞

おうきょうし 「王恭詩」 たかはし 高橋 しほう 紫芳

王恭詩 70 字を 3 行に卒なくまとめてあり、墨色もこの作品の力強さの一端を担っています。重厚さの中にも、どこか爽やかさを感じられる動きのある佳作です。筆使いも普段の研鑽、努力が見てとれる作品になっています。今後も更なる精進を期待いたします。

## ○埼玉県美術家協会会長賞

りはくし く 「李白詩句」 よこた 横田 ほくえん 北園

淡墨の温雅で柔和な特質を生かし、李白詩句の叙情に満ちた詩句を一気呵成に書きあげた痛快な作品です。行の通りも良く、伸長な線で見事に書ききっています。文字の大きさや線の太細、文字群と周囲の余白との調和も申し分なく、心地よい響きを醸成して見せた優作と言えます。今後更に高みを目指し、精進を重ねてください。

## ○高田誠記念賞

り どうせいし 「李道生詩」 あらい 新井 ゆうほう 幽峰

奇を衒うこともなく淡々としたリズムで、円を描くような独特の手法は爽快感に満ち溢れています。

永年に亘り筆を持ち続け、鍛錬を続けた者でしか築くことの出来ない境地がこの作に凝縮し、結実をみた正に高格の書と言えます。どうしても展覧会に出品するとなると気負いが表出するものですが、飄々とした清涼感を持つこの作は出色です。